
悪魔な天使と天使な悪魔

オレオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔な天使と天使な悪魔

【Nコード】

N5431T

【作者名】

オレオ

【あらすじ】

幼馴染でイケメンな悪友と、なぜか家にやってきた黒髪碧眼天然系・白髪黒眼ツンデレ系（笑）な双子、さらに様々な个性的キャラ達に囲まれた器用貧乏な主人公（↑キャラ薄くね!？

の日常系？学園系？なコメディ―小説に・・・なればいいなあ

e p 0 1 神社で昼寝（前書き）

短編から念願の連載へ！！

e p 0 1 は短編とあまり変わってません o r z

e p 0 1 神社で昼寝

【????】

ちゅんちゅん。

スズメ?の鳴き声が聞こえる4月下旬。

俺この時期好きなんだよなあー。だって暑くもないし寒くもない最高だよな?

なにより昼寝にはちょうどいい温度だよな?

俺が休日この神社で昼寝するのはもはや習慣となっちゃったらしい。

ジジ臭いつて?ほっとけ!

よし、もう少し寝ようかな。

「・・・・・・・・」

ふと、寝ようとした俺の耳にかすかに話声がきこえた。

ん?なんだ?女の子の声?みたいなのがきこえるけど・・・・・・・・。

真生^{まお}か?にしては声が高すぎるよな?

んじゃあ、参拝客か。まあ木陰の裏手の方だし正面からじゃ見えんだろ。

・・・遠くなつていく意識の中

「ねえ、冬華^{ふゆか}。これなんだと思う?」

「んー?和尚さん?」

「・・・あなたに聞いたあたしがバカだった。」

ん？なんか声が近いんですけど・・・。

「あつ！」

ごつ！

ざばあああ！！

「冷たっ！！！！！」

なんで、いきなり俺の顔面に水が！？雨漏りか！？ふざけんな！いや雨降ってないよ！

「あつ、起きた。」

「す・・・す・・・すみません！！！」

「あちゃー、こりゃシャワー浴びて服乾かさんと風邪ひくな・・・ん？」

結構冷水だったので目が覚めてしまった。

そして、正面を見ると

俺の目の前には大荷物を抱えた二人の少女がいた。

一人はさつきから俺に謝っている黒髪に碧眼という神秘的な美少女
もう一人は白髪黒眼といういかにも2次元のお方ですか？と思いた
くなるような美少女。

てか双子！？

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！わたしがバケツを蹴ってしまったばかりに！！」

「いや、俺は別に大丈夫だから・・・」

「そうよ、冬華。そもそもこいつがあたまの方にバケツおいとくのが悪いのよ。」

「だめだよ・・・愛華^{あいか}あ。そんなこといつちやあ・・・。」

なんなんだこいつら・・・？特に白髪の方すげえいらつく。

まあそれより服乾かしてシャワー浴びんとな・・・マジで風邪ひくぞ。

4月下旬とは言ってもまだまだ寒いしな。

「んじゃあ、俺は家に帰るんで。」

そういつて立ち去ろうとすると、黒髪の方がこっちに近づいてきた。

「あの、よかつたらこれ使ってください！」

親切だなあと思って目を落として見ると

・・・n？なnですかコレ？

淡いピンク色で三角形のタオルなんて初めてみるなあ・・・。

「ちょっと！冬華！それあんたの下着でしょ！？」

え・・・mjd？

「やだなあ、愛華。わたしがそんなものだしわけ……きゃー
——！！！」

なんつうか……ごちそうさまです。

「ほら、これ使いなさい。冬華のだけど……」

タオルを差し出されてしまった。普通なら遠慮するべきなんだろうけど、ここは素直に受け取るところ。

「ありがとう。んじゃ。」

簡単にお礼をいって足早に俺は自分の家にむかった。つってもこの神社の階段おりたらすぐなんだけどね。帰る途中ありがたくタオルを使わせてもらった。

きれいな花柄のタオルで

なんつうか……すげえいい香りがした。

ちよつと幸せな気分になりながら俺は家にかえった。

—玄関前—

「ただいまー。」

誰もいないとっついていてもなんとなく言ってしまう。

親父の仕事でお袋も一緒にいつてしまった。

つまりこの家には誰もいないはずなのだが……。

「お、零^{れい}か。お帰り」

なんと迎えてくれたのは神崎^{かみさき} 真生^{まお}。

あつ、真生は男ですよ。注）浅田真。ではありません。

てかあんた、不法侵入ですよ？・・・。

「つか、鍵かけといたんだけど・・・まさかお前」

「ああ、ピッキングしたから」

アウトおおおおお！！！！

「はあ・・・まあ、いいか。」

真生はこんなんだけど俺の親友（悪友？）だ。幼稚園からの付き合いだしな。

小中高と一緒にのそこだし。

あつ、勘違いしないでね。俺はノーマルですよ。

「何つつたってんの？」

こんな感じでいつも真生とあることをしています。

えっ？なにやってるかって？それはまた後日ということぞ。

―数時間後―

「じゃあな。また学校で。」

「うい。」

神社の前で真生をみおくつて

俺は神社に向かった。

なぜかって？神社に行くことが癖になってるのさ！

1日に3回くらいはいつてるからな・・・どうせ暇人ですよ！

あつ、一応タオルはもってきてます。 いればいいんだけど観光客っぽかったからなあ

こんなところに観光しにくるのもどうかとおもうけど……。

俺や真生が住んでいる町は田舎ではないが都会とも程遠いような平凡な町だ。

なので有名なところなんてものは存在しない。

そんなことをかंगाえていると階段を上り終わり、神社についた。

「あつ！」

いた。昼んときの双子。

二人は神社の小さな石段に肩を寄せて寝ていた。

俺は近寄って腰を落とし、まじまじとみてる。

しかしホントにてんなーこいつら。

髪色と眼の色……あと性格以外ほんと変わらんない。

体の凹凸まで……。

「ん？……あんた昼間の……てかなにじろじろ見てんの？」

若干やましいことを考えていると白髪が起きた。黒髪は……まだねてんな……。

「ああ……あつ！そうこれ返そうかなと思つて。」

俺はタオルを差し出す。

「礼はこの子にいつてやつて。」

タオルを受け取りながらそういつて白髪は黒髪を指差す。

「まあ、礼としちゃんんだがこの町のことくらいは知ってるからなんでも聞いてくれ。あんたら観光客っぽいし、宿とかに戻らなくていいのか？」

そんなこと言うと予想の斜め上の答えが返ってきた。

「ああ、観光ではないんだけどね・・・あつ！そうだ！あんた神社の近くの家の桐野きりのって人の家知ってる？」

ん？桐野・・・えーと。

「それたぶん俺んちのことだと思うけど・・・」

「あ、そうなの？前にいたところの人のからその家にまず行けっといわれてるから・・・んじゃ悪いけど案内してくれる？」

あつ、なんか今、変なフラグが立った気が・・・いやあないないあるはずない。

「ほら！冬華！起きなさい！」

「んう？愛華おはよー。」

「寝ばけてないで行くわよ。行き先がわかったわ。こいつんちよ。」

ビシッ！と音を立てそうな勢いで俺を指さしてくる
すみません。指差さないでください・・・。

「ええ？あれ？この人どつかで・・・あ・・・さっきはごめん

なさい！」

顔をトマトのように赤くして謝ってくる。

きにしないでいいですよー。むしろごちそうさまって感じです・・・。

「んじゃ、とりあえず行こうか。」

「え・・・どこに？」

この子話聞いてたか？

「だからこいつんちっていつてるでしょ！ほら！いつまでもねぼけてないっ！」

ビシッ！

白髪の放ったデコピンが黒髪のデコを正確にとらえた。

—玄関前—

「ただいまー。」

まあ誰もいないんだけど・・・。

「「おかえり。」」

あれえー、おかしいな幻覚&幻聴が・・・。

「残念ながら幻覚でもないし幻聴でもないんだなあ。」

そこにはイケメンな俺の悪友がニヤツと笑っている。
でも、なんで？さっき帰らしたのに……。

「それは、私が呼んだんだ。」

「柚姉ゆずえ！どしたのうちにくるなんて？」

姉とは言っても親戚の姉ちゃん今年齡はたしか……………。

「零、それ以上考えると成績オール1にするぞ。」

「うそうそ！！ごめんなさい！！」

霧咲きりさき 柚ゆず 年齡20代半ば、後半で若くして俺と真生が通っている
私立秋桜高校あきこのくわの理事長様である。ちなみに独身である。（笑）

「はい、お前オール1決定。」

なぜ、俺の心を読めるんだ！？
つか、大事なことを忘れてた……………。

「柚姉えこの二人なんだけど……なんか聞いている？」

「ああ、愛斗まなとさんから聞いているぞ。冬華と愛華だろ。」

愛斗ってのは俺の親父ね。源氏名みたいな名前だけど本名だからね。

「いや、お前の名前も十分源氏名っぽいから。」

真生、てめえーにはいわれたかねえよ！

「はいはい、そこまで悪ガキども。んで双子、なんでここにきたか知ってるのか？」

「いえ、あたしたちはなにもしないでここにいられてるので」

さっきの俺への態度から一変、急におとなしそうに敬語で話始めた
白髪

「なるほど、んじやいい機会だし全員よくきけ、これから……とりあえず2年間か？うちで雨宮^{あみや} 冬華と愛華の二人をこの家で預かることになった。まあ家賃とか食費・学費とかは主に雪野神社の巫女？（笑）的な仕事をしてくれればいい。基本的はこの家のお金は私が管理するようにいわれてるし、てなわけで仲良く暮らすよーに。」

「……ええええええー！！！！」

俺、冬華、愛華の3人がキレイなはもりで絶叫した。

「あつ、それと真生もここで暮らすことになったからな。まあいつも家にきてたから家の人間みたいなものだしかまわんだろ。それと零が双子を襲うかもしれない、見張りだ。それと私もここに住まわせてもらうぞ。あまりかえってこれないとおもうがな。」

どうせあんたはエロゲとか夜中理事長室でやってんだろ。

「そんな話きいてないですよー！」

愛華が俺と冬華の気持ちを代表して言う。

「まあ理由はおいおい話すから。では私は夕飯の食材をかってくる。」

「そう言い残し柚姉えはいつてしまった。相変わらずゴーイングマイウェイな人だ。」

「……何固まってるんのお前ら？」
逆にお前はすげえ冷静だな、おい！

「メンドクせえがなるようになったんだからしょうがねえだろ。それより自己紹介でもしとこうぜ。オレは神崎 真生。不本意だがこいつのとは幼馴染で悪友だ。」

「不本意な奴でわるかったな。俺は桐野 零。一応この家の住人です。」

「あつ、わたしの名前は雨宮 冬華だよ。よく『ふゆか』っていわれるけど『とうか』です。今後ともよろしくねっ。」

「あたしは雨宮 愛華。双子だけど冬華の妹になるわ。よろしく。」

「……はあ……。」「」

俺と双子のため息がかさなった。

真生はそれをみてクスクス笑っている。

まあこんな感じで俺の平和？な日常が始ま……。るのかな？

……。てか、俺の憩いの神社があああー！。

e p o 2 風呂桶はあたると普通に痛い（前書き）

今回は・・・真生視点がはいってきます。

作者は今文字数や更新日時についてなやんでいます。。

ep02 風呂桶はあたと普通に痛い

【零】

柚姉えによる衝撃発言の後、

俺たち4人はこれからどうするかという議題で話あったのだが
まったくいい案は出ずに、終わった。

とりあえず、双子が疲れていたようだったので、
先に風呂に入らせた。

・・・大丈夫です覗きませんよ。

すると、ちょうど柚姉えが買い物袋を提げてかえってきた。

その袋を無言で俺に渡し、真生が座っているソファに腰を下ろした。

「何、コレ？」

「何だ、零。お前視力悪かったのか？」

夕方のバラエティー番組を見ながら俺の方は全く見ずにそういう理
事長様。

「そう、お前が作るんだ。」

心読むなって・・・。

まあ、いいか。

「真生。悪いけど手伝って。」

「やだ。」

即答する俺の親友（悪友）。

「質問が悪かった。今暇？」

「暇・・・ではない。ケータイいじってる。」

そんなことを言っている俺の悪友に柚姉えは、

「真生・・・成績オールい」

「ありがたくやらせていただきます。」

真生も柚姉えには逆らえないようだ。

そんなことを考えていると、真生がめんどくさそーにこちらに歩いてきた。

ホントこいつ顔はいいのにこの性格はダメだなあ。

「んで、柚姉え。この食材で何作ればいいの？」

「鮭とホウレンソウの和風パスタ。」

「了解。」

—20分後—

「柚さん、お風呂ありがとございましたー。」

愛華があがったようだ。

「どうせこれから毎日入ることになるんだ。きにするな。」

「冬華はまだか？オレも風呂にはいりたいんだが・・・。」

真生てめえー次は俺がはいろうとおもってたのに！

「もうちよつと入るっていったわよ。にしても遅いわね・・・。
まさか!？」

そついうと愛華は急いで風呂場にもどっていった。

「きゃーーーーー!!！」

叫び声!？なんだ!？

「零、ちよつと見てこい。」

「わかった!」

そして俺は脱衣所に駆け出した。

―脱衣所前―

ドンッドンツ!!

俺は激しく脱衣所のドアをはたいた。

「おい!愛華!どうした!!」

「・・・・・・。」

返答がない。

「おい！入るぞ！！」

ガチャ

俺が脱衣所の扉をあけると、

ガラッ

それと同時に風呂場のドアが開く音が聞こえた・・・。

「まったく！風呂で寝るとかどうかしてるわ。あたしが助けなかったらあんた今頃、水死で明日の朝刊1面よ。」

「ごめ〜ん。愛華。ついっつかり・・・え。」

俺の眼球には一寸まとわぬ黒髪の少女と、水にぬれたのか薄い部屋着がスケスケ状態の白髪の少女がうつった。

「「「・・・」」」

俺を含め3人瞬きひとつせずにフリーズしてる。

「き・・・」

「「キャーーーー！！」」

「「ごめんなさつ！」」

「ッ！」

謝ろうとしたところ

冬華の投げたおけが俺の顔面にみごとクリーンヒットした。

あれ・・・目の前が真っ暗になってきた・・・。
ああ・・・なるほどこれがポ。モンで負けるとなる
ブラック・アウ・・・。

【真生】

初、オレ視点か。

まあ、どうでもいや。
にしても・・・。

「遅い。」

「なら、あんたも見てくださいよ。」

「ええ、メンド」

「「きゃーーーー」」

どだっ！

双子の叫び声の後に何かが床に倒れる音・・・。
うん、だいたい予想はついた。

「「真生ー助けてー！！」」

ああ面倒だ・・・。

「ちょお、見てくる。」

「そうか、私はいったん学校にいつてくる。」

「わかった。」

どうせ、この理事長は理事長室でエロゲやったり漫画よんだりしてくるのだろう。

理事長室を私物化してたからな・・・。

―脱衣所―

「おい、双子・・・っていねえし。」

「お風呂場にいるから、それ、運んどいて。」

それって・・・完璧物扱いだな・・・。

「さっさと着替えてリビングこいよ。飯にすつから。」

「・・・はい。」

―リビング―

とりあえず、オレと双子の3人で夕飯をとりながら、さっきなにかあったかを詳しく説明してもらった。

「アッハッハッハ！風呂桶があたって気絶するとか漫画かアニメでしかみたことねえよ。にしても、愛華も冬華もどんまいすぎるな・・・（笑）。」

「うう・・・笑ごとじゃないのにー。」

「ホントよ！最悪だわ！」

「まあまあ、とりあえず飯でも食べて機嫌直せよ。」

「……いただきます。」

パクリッ

「……うまー!」

見た目と性格は違っても根っこはおんなじみたいだな。

「柚さん。お料理上手なんだね!。」

「ほんとね。性格的にできなそうだと思ってただけだね。」

性格的にって……。

まあ否定はしないケド。

だから、結婚できないんだよなあの人。

「愛華が思ってるとうり、柚は料理できねえぞ。それ作ったのはオレと零だ。まあ、8割方あいつが作ったんだけどな。」

「……冗談でしょ。」

「オレが冗談いう人間に見えるか?」

「……でもこれ多分わたしたちが作ったのよりおいしいよね?」

「そうね。ちょっと自信なくしたわ……。」

「・・・まあ、あいつは家庭環境に家事全般こなせるからな。さて、オレは風呂入るから、食器はキッチンにおいとけ。」

「食器洗いくらいわたし達でやつとくよ？ね、愛華。」

「うん。」

「そうか、んじゃ頼んだ。」

――風呂場――

ああ、疲れた。

今日はさっさとねるか・・・。
ん・・・？

今更になつて気付いたケド、オレと双子どこでねりゃあいいんだ？

ep03 ツンデレ系は初なんです。(前書き)

主人公より悪友の方が出番が多くなっています・・・。
どしよ・・・。

ep03 ツンデレ系は初なんです。

【真生】

「ああ、寝床どうすつか・・・？」

ソファーでは寝たくないんだがな。腰と首痛くなるし・・・。
袖に聞いてみつか・・・。ケータイはリビングだな。

ーリビングー

「おい、双子！オレのケータイそこに・・・。」

リビングのドアを開けると、

白髪の今日初めてあった少女がソファーで横になっていた。

とりあえず、オレは愛華の寝ているソファーの端に腰をおろした。

・・・ふーん。だまって寝てると幼い顔してるし、カワイイ感じな
んだけどな。

性格が・・・あー何だっけ？ツンデレ？とかいうやつっぱいな。で
も、コイツで、デレてねえか・・・。

「おら、起きろ。」

ビシィ！

「いったー！！あんた女の子になにしてんのよー！！」

「『でこぴん』なう。」

「ああ、なるほど。『いったー』と『ついたー』をかけてると・
・ってなに高度なボケかましてんのよ！あんだー！」

「いや、そこまで考えてねえケド。」

「うるさい！」

愛華はそう叫ぶと右手を高く上げてオレの顔めがけて当てようとしてきた。

まあ、ようはビンタしようとしてきたわけだ。

しかし、

オレはこうみえて、運動神経、動体視力には自信があるし、あるものを習っていたおかげで、簡単によけられるわけだ。

ビュッ！

手が風をきる音がした。

でも、オレは今現在愛華に押し倒された形になっている。

なぜかって？

こういう流れだ。

愛華のビンタ。

←
オレ避ける、しかし、ソファーによっかかっていたわけではないので、

背中からまともに床へ。

←
愛華は当たると思ってたのかかなり上体を前向きにしてたらしく、ソファーから落下。

←
オレの体へ着地。

大体こういうのの後には誰かしらやってくる。

「ただいま。」

ほら、柚が帰ってきた。

すると、柚は目にも止まらぬ速さでケータイを取り出し、

カシャ！

っと撮影した。・・・って撮ってんじゃねえ！

「撮影なう。」

ちよお、まててめえいつからいた？

「デコピンなうから。」

「はあ、もういいわ。めんどくせえ。」

「よくないわよ！どうすんのよあの写真！」

「正確な意見だが、あいつのケータイは理事長室のパソコンとつながってて、自動的にバックアップできるようになってるんだよ。」

愛華は啞然としてポカーンと口をあけている。

「ってわけだ。ああ、それより柚、オレと双子はどこでねりゃあいんだ？って冬華がいねえケド？」

そういつて、オレはやつとオレの上からどいた愛華の顔を見る。

「あ、冬華なら零のことみにいくつて・・・こつち見んな！」

とこんな感じに、愛華はデレ期にはいりました。
んな、どうでもいいことは置いて・・・。

「お前らの部屋も2階だぞ。」

んじゃ、いくか。

でも、この家そんな空き部屋あつたっけ？

―零の部屋前―

コンッコンッコンッ

2回ノックつてトイレらしいんだよね。

だからといって、3回が本当かどうか知らないケド。

「・・・」

返答がないな・・・。

「突入！」

つて、おい！柚！カメラにしながらはいんじゃねえ！

「おゝ、見かけによらず結構大胆なんだな。」

カシャカシャと写メつてる柚をどけてオレと愛華はどうなっている

のかを見た。

あゝこりゃたしかにおもしろいことがおこってるなゝ（笑）

愛華は・・・またポカーンとしてるわ。まあ気持ちはわからなくわないけど。

だって、零のベットの中に冬華もいるんだからな。

「（パクッパクッ）！！！」

金魚？（笑）

「おっと、愛華。声は出すなよ。出してもいいが、さっきの写真が学校中に張り出されるぞー。」

この理事長どSだな。

「おっと。」

愛華が倒れてきたのでとっさに受け止めてしまった。

・・・気絶してねえ？

以外に初なんだな。

「真生、そいつは部屋に連れてけ。場所はお前の部屋の前だから。

ああお前の部屋はこの部屋の隣だ。ちなみに冬華はこの部屋の正面。

」

「こいつらはどうするきだ？」

「んあ？このままにきまつてるだろう。明日が楽しみだ・・・。」

「はあ、まあイケドオレは関係ねえし。」

「・・・」

「何だよ。」

「いや、あの真生がお姫様だっこするなんてなあとおもって。」

「ひきずるわけにもいかんだろ。なんならお前が運べや。」

「無理無理。写メゲッツ。」

カシャ！

「・・・もう寝っから。」

「部屋は大体整理してあるからな。おやすみ。」

「おやすみ。」

ばたんっ！

はああ・・・。

オレは心の中で大きなため息をついた。
勢いで零の家にきちまったケド、母さんにしか事情ははなしていない。

父さんは・・・もうオレのことなんかどうにもおもってないだろう。
あとはアイツか・・・。

はあ、面倒事が増える一方だ。

んなことを考えながらオレは愛華をベットに下ろし、今日から自室になる部屋に戻った。

柚がいつたとうり、オレの荷物は段ボールになって置いてあったり、大きい荷物はもうすでに設置まで完了していた。

さすが、アー。引越センター・・・。

なんて、関心どうでもいい。

とりあえずオレはベットに横になり、部屋の電気を消した。
そして、寝ようかとおもっていると、

そういえば、オレらアイツ（柚）に弱みにぎられまくってねえ？

重大な事に気付いたが睡魔には勝てず、オレは眠りの世界へおちていった・・・。

e p 0 4 早朝に神社へ（前書き）

最近は時間がないので1000字程度にしました。

e p 0 4 早朝に神社へ

【零】

ちゅんちゅん。

・・・あれ？デジャブ（笑）？

おはようございます。桐野 零です。なんでこんなにあらたまってるってるかって？

ギィギィッ。

オレは壊れたブリキのように再び首を横に動かした。

「すう・・・すう・・・。」

おいしい！なんで俺の寝てるベットの隣に黒髪の女の子がいるんだよおお！

いや、いやじゃないよ！むしろありがたい・・・のか？

ちよつと待て、俺寝てる相手になにもしてないよな。

うん、お互い服着てる。

「んう？」

「・・・お・・・おはよう。」

できるだけ爽やかに言ってみる。

すると、冬華はみるみる内に顔が真っ赤になっていき、はじかれたようにベットからとびおりた。

「なつななななんで、零君がわたしの部屋に！なんで一緒に寝てるの！？」

「いやいや！ここ俺の部屋だから！それに一緒に寝てるってこつちが聞きたいよ！」

「えっ、だって昨日確か……。／／／／／。」

「なんで、急に赤く……。あっ！。
そういえば、昨日風呂場で……。」

「あの、その……。ごめん。」

「あっ、うんうん。アレは私が悪かったから……。」

「「……。」「」

「どうしよ……。お互い沈黙だよ。
そういえば、今何時だろ……。」

「あ、あのさ、神社行かない？」

「えっ……。今5時だよ？」

「ですよねー。」

「普通朝の5時に神社に女の子誘いませんよねー。」

「まあ、俺はちょっと、行ってくるから。あっ、ベット使ってもいいから。まだ部屋整理されてないだろし。」

そういつて、部屋から出ようとする

「わたしも、行くよ。」

マジですか。

―神社―

神社で俺は昨日あったことや、なんで一緒に寝ていた理由をきいた。
・・・でも、寒かったからベットにもぐったって・・・小学生かよ。
・・・

「にしても、零君ホントにこの神社好きだねえ！。」

「えっ！・・・うん、まあね。小さいころから好きだったからね。」

「そうなんだあー！。」

「・・・冬華はさあ、自分の存在について、どう思ってる？」

「自分の存在？」

唐突に聞いたせいか、少し戸惑ってるようだ。

まあ、俺でもそうなるけど。

「うん。俺さ、たまに思うんだ。自分が何のために生まれて、何ができて、死ぬまでに何ができるのか。自分が存在していて、迷惑かけてないかとか誰がどう思ってるんだろうかとかさ。厨二病くさいんだけどね。」

そう言つて俺は自嘲ぎみに失笑する。

「わたしはねそんなに難しいこと考えたことないなあ。」

そう言つて、石段から立ち上がりクルツと回つて、コツチを向いた。

「わたしはこうして誰かとしゃべれてることがうれしいんだ。人と繋がつてそれだけでいいんだよ。零君だつて一人で生きてるわけじゃないでしょ？」

「・・・そうだね。」

俺は冬華は強い人間なんだと思った。
俺なんかより、ずっとずっと・・・。

「・・・かえろつか。」

「うん。」

そうして、俺達はゆっくりと階段をおりて帰路についた。

さあ、今日は日曜日だ。

とりあえず、真生と愛華をおこすか・・・。

e p o 5 夏じゃなくても汗はでる（前書き）

最近には本当に忙しくてパソコンを開いてる暇がそうそうありません。

今回は誰が会話しているのかわかりにくいかもしれませんが。

e p o 5 夏じゃなくても汗はでる

【冬華】

わたし達は神社から、家に帰ってきた。

帰り道わたし達は一言もしゃべらなかつた。

でも、その沈黙が別に嫌なわけじゃなかつた。

なんて、

こんなシリアスな展開は押し入れの中にでもしまつといて、

あつ、でもでも押し入れの中にはお布団があつたよね。

「冬華ー、二人とも起きたー？」

零君の声でわたしは押し入れだの食器棚など考えていた空想から、
現実にもどつた。

「あつ、うん今起こすよー！」

家に戻ってきた後、零君は朝食を作るからと言って、二人を起こしてくるようわたしにたのんできたのだ。

最初は、わたしも手伝おうかなー？とか思ったけど、昨日の零君の夕食の腕前を思い出した途端、作る気が波にのみ込まれたようにして消えた。

なんで、零君はあんなに料理がうまいんだろう？

後ろにチャックでもついてて、おばちゃんでもはいつてるのかな？
女の子としてはちよつと悔しいな。

「愛華」。ほら起きて。」

「んう？」

「朝ごはんだよ。」

「・・・食べる。」

愛華は基本的に朝が弱いので言動が若干幼児退行する傾向があるんだよね〜。

昔はいつもこんなんで、わたしの方がしっかりしてたんだけどなあ・・・。

今は、愛華の方がしっかりしてるってみんなにいわれるんだよなあ・・・。
なんでだろう？

「下で零君が朝食用意してるから、先にいってて。」

「・・・うん。」

愛華はコクツとうなずいて、階段をおりていった。
さて、真生君はと・・・。

真生君の部屋を開けるとそこには誰もいなかった。

ただ、乱雑にルーズリーフが散らばっていたり、パソコンがついていたりしていた。

「なんで、いないんだろ？零君にいわなきゃ。」

——リビング——

【零】

「えっ？真生がいない？」

冬華はそついい困った顔をしていた。

「うん。どこいつちゃったんだろうね。まさか反抗期で家出とか！？」

反抗期って……。

『ただいま。』

「帰ってきたみたいだね。」

「ただいまつと。……何？どしたのお前ら？」

「あつ、うんうん、なんでもないよ。それよりどうしたのこんな朝早くに……まさか。」

そういつて、友人全員から『お前がしてもなあ……』といわれる怖いと言ってもらえない睨みを真生に向ける。

すると、真生は全く気にした様子をせず、

「ああ、柚のところに新しいのが来たらしいから、簡単そうだし、一人で行ってきた。」

はあ、と俺はため息をつく。

「前から一人ではいくなって言ってるじゃん。まあいいや。」

「悪い悪い。」

真生は全く悪びれた感じをせずに言う。

*真生は基本朝は低血圧なのでテンションが変わりません。(↑普段もこんなかんじじゃね!?)

「ねえねえ。」

真生と話していると、冬華が話しかけてきた。

・・・しまった。

そう思つて、真生を見ると、真生もこちらを向いて普段あまりみせないような顔をしていた。

「「な・・・なに力ナ?」」

俺達幼馴染は長年の付き合いということであろうか、考えていることが同じで見事にハモってしまった。しかも苦笑い×2で。

しかし、天然な黒髪碧眼美少女は俺達が動揺しているのを気付かないままこういった。

「さっきから、何の話してるの?」

4月だというのに俺達の背中には汗という名の冷や汗は流れた。

e p o 5 夏じゃなくても汗はでる（後書き）

本当に時間が欲しい・・・。

e p o 6 朝とトラウマへのフリーズ? (前書き)

今回も少なくて申し訳ありませんorz

ep06 朝とトラウマへのフタゲ？

【零】

俺達は今朝の騒動から一転、4人仲良く(?)朝食を取っている。えっ？理事長？理事長室にヒッキーしとるがな。

しかし…なんだこれ…

真生：無言で食う

愛華：半分寝ながら食う

真生は家的にこういう礼儀があるのはわかるけど、

愛華は異常だろ…寝ながら飯食うとか…

たしか、冬華が低血圧だからとは言っていたけど、ここまでとは…

そんなことを一人でかんがえていると、真生が朝食を食べ終えたらしく、席を立ち愛華の耳元まで、顔をもって行き、ボソツと何かを言った。

俺と冬華はお互い首を傾げていると、

みるみる内に愛華の顔は赤くなり、今まで閉じていた目を大きくあけながら、口をパクパクさせていた。

「あんた！朝からなんて事言ってるのよ？」

「別に、事実をいっただけだろ。」

激昂する愛華に対して真生は悪戯っぽい笑みを浮かべて返答している。

「ねえ愛華、どうしたの？」

俺も気になっていたことを冬華が言う。

そうすると、愛華は冬華のことを無言でジッと睨み、先ほどとは変わってテキパキと朝食を取り始めた。

一方、冬華は小動物のように、体をブルブルと震わせ涙目になっていた。

いつも思っんだが、冬華は姉としての威厳が全くない。むしろ姉という枠から外れているのではないかと時々思う。

朝食時のよく意味のわからない一件から、俺達4人はテレビを見ながら食後のお茶を飲んでいると、

「ただいま。」

目の下にクマをつくった、我らの暴君、柚様がおかえりになった。

「唐突で悪いんだけど、冬華、愛華こっち来て。」

あきらかに不審者の人が「飴玉やるから、嬢ちゃんちょっときてー。」というようにクマ女（笑）手招きをした。

冬華と愛華は警戒心を高めているが、はっきり言ってこの人に警戒とか注意深くとか、ようは保身をとろうとしても、ほぼ無駄だ。

そんな考えをしながら、冬華と愛華に心の中で「南無…」とかおもっている、

「零、さつき失礼なこと考えただろ、お前もちよつと来い。」

みなさん、心ってよまれるんですね。

柚姉えについていくと、各々自分の部屋の前に立たされた。

「それでは、行って来い。」という柚姉えの掛け声とともに、俺達3人は部屋の中に入れる。何するんだ？と思いつつ、暗くなっていた部屋の電気をつけると、

そこには、黒を基調とした、ロングスカートにフリルのついたエプロン、覆われてもきれいだとわかる手を隠すようにつけている白いフリルのついた手袋、さらに髪にもフリルの施されている力チューシャを身にまとっている。

まあ、俗にいうメイドさんですね、はい。しかも、3人もいますね。

俺が茫然としていると、他の2人にはない腕に腕章をつけたリダーとおぼしきメイドさんがにつこりとほほ笑みかけてきた。

その後、3人のメイドさんに飛びかかれて、俺の意識は途絶えた。

e p o 6 朝とトラウマへのフタゲ？（後書き）

この話は後々の番外編に続きますので
次回からは学園編になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5431t/>

悪魔な天使と天使な悪魔

2011年10月9日04時02分発行